

中国の文化IX 第一回

なぜ中国文化を学ぶのか

落語「饅頭こわい」を例に



なぜ中国文化を学ぶのか？



「日本固有の文化にはどんなものがあるの？」
外国の人にこんな質問をされたら、あなたはど
う答えますか？

落語

〔解説〕

ここではその一例として、日本の伝統文化の一つである落語を取り上げてみよう。

落語は、戦国時代から江戸時代初期にかけて活躍した僧・安楽庵策伝（あんらくあんさくでん、一五五四～一六四二年）を始祖とする、日本が世界に誇る笑いの伝統芸能である。現在も東京、関西を中心に約八〇〇人の落語家が活動をしている。



安楽庵策伝上人(京都誓願寺蔵)

桂枝雀（一九三九―九九）

〔解説〕

ここでは、関西の落語家故・桂枝雀が語る「饅頭こわい」という落語を聞いてみよう。

桂枝雀は、一九三九年、神戸の生まれ。中学時代に父親を亡くし、働きながら定時制高校に通い、神戸大学に進学。入学後、一年で大学を退学し、桂米朝の弟子となった。

しかし、三三歳のときにうつ病を発症。病氣と闘いながら、英語落語や笑いの理論化に努めたが、五九歳で惜しまれながら、この世を去った。

桂枝雀(1939～99)



古典落語 「饅頭こわい」

〔解説〕

新の舞台は、とある長屋。そこに暮らす連中が雑談に花を咲かせている。みんなが怖いものは何かと話しているとき、みつつあんが意外なものを挙げる。それはなんと饅頭。日頃、お高くとまっているみつつあんをギャフンと言わせようと、長屋の連中はたくさんの饅頭を持ってみつつあんの家へ向かったのだが・・・

桂枝雀(1939～99)



桂枝雀「饅頭こわい」

(1983年7月10日放送MBS「笑いころげてたっぷり枝雀」より)



なぜ「饅頭こわい」なのか？

アジアから見た落語

〔解説〕

この落語は、中国の古代笑話を翻案したもので、原話に登場する「饅頭」は、お菓子のまんじゅうではなく、中国の「饅頭(マントウ)」、すなわち蒸しパンを指す。

中国では、北方は小麦、南方は米を主食とし、この話の舞台となっている北方では、小麦で作った蒸しパンがご飯の役割をしていた。

つまり、米を主食とする日本でいえば、「おにぎり怖い」といった笑い話なのである。



中国北方の主食「饅頭(マントウ)」

アジアから見た落語

〔解説〕

落語は、日本が世界に誇る笑いの伝統芸能だが、その演目を充実させる過程において、中国の古代笑話から多くの笑話を取り入れている。

「饅頭こわい」も中国宋代の葉夢得（一〇七七～一一四八）の筆記（エッセー集）『避暑錄話』に引用された笑話が原話になっている。

讀書而不應舉則已矣讀書而應舉應舉而望登科登科而仕仕而以敘進苟不違道于義皆無不可也而世有一種人既仕而得祿反嚶嚶然以不仕為高若

欽定四庫全書

避暑錄話
卷下

七十三

欲棄之者此豈其情也哉故其經營有甚于欲仕或不得間而入或故為小異以去因以遲留往往遂竊名以得美官而不辭世終不寤也有言窮書生不識饅頭計無從得一日見市肆有列而鬻者輒大呼仆地主人驚問曰吾畏饅頭主人曰安有是理乃設饅頭百許枚空室閉之徐伺于外寂不聞聲穴壁窺之則以手搏撮食者過半矣亟開門詰其然曰吾見此忽自不畏主人知其紿怒而叱曰若尚有畏乎曰有

猶畏臘茶兩碗爾此豈求不仕者也

宋の筆記に登場する「饅頭こわい」

ある貧乏な書生。饅頭（蒸しパン）を食べたいと思うのだが、手に入れる方法がない。ある日のこと、市場で饅頭を並べて売っているのを見た彼は、大声をあげて地面に倒れた。店の主人が驚いてたずねると、「私は饅頭が怖いのです」と答えた。

（宋）葉夢得『避暑錄話』 卷下
像亦可一灑然也

讀書而不應舉則已矣讀書而應舉應舉而望登科登科而仕仕而以敘進苟不違道于義皆無不可也而世有一種人既仕而得祿反嚶嚶然以不仕為高若

欽定四庫全書

避暑錄話
卷下

七十三

欲棄之者此豈其情也哉故其經營有甚于欲仕或不得間而入或故為小異以去因以遲留往往遂竊名以得美官而不辭世終不寤也有言窮書生不識饅頭計無從得一日見市肆有列而鬻者輒大呼仆地主人驚問曰吾畏饅頭主人曰安有是理乃設饅頭百許枚空室閉之徐伺于外寂不聞聲穴壁窺之則以手搏撮食者過半矣亟開門詰其然曰吾見此忽自不畏主人知其紿怒而叱曰若尚有畏乎曰有

猶畏臘茶兩碗爾此豈求不仕者也

宋の筆記に登場する「饅頭こわい」

店の主人は「そんな馬鹿なことがあるか」と饅頭百個ほどを置いて、この書生を部屋の中に閉じ込めた。外からようすを伺うと、静かで声がない。壁に穴を開けて覗いてみると、饅頭を手でつかみ、すでに半分ほど食べてしまっている。

(宋)葉夢得『避暑錄話』卷下
像亦可一灑然也

讀書而不應舉則已矣讀書而應舉應舉而望登科登科而仕仕而以敘進苟不違道于義皆無不可也而世有一種人既仕而得祿反嚶嚶然以不仕為高若

欽定四庫全書

避暑錄話
卷下

七十三

欲棄之者此豈其情也哉故其經營有甚于欲仕或不得間而入或故為小異以去因以遲留往往遂竊名以得美官而不辭世終不寤也有言窮書生不識饅頭計無從得一日見市肆有列而鬻者輒大呼仆地主人驚問曰吾畏饅頭主人曰安有是理乃設饅頭百許枚空室閉之徐伺于外寂不聞聲穴壁窺之則以手搏撮食者過半矣亟開門詰其然曰吾見此忽自不畏主人知其紿怒而叱曰若尚有畏乎曰有

猶畏臘茶兩碗爾此豈求不仕者也

宋の筆記に登場する「饅頭こわい」

店の主人は急いで扉を開け、問い詰めた。書生は答えていった。「饅頭を見たら、急に怖くなくなったんです」騙されたと知った主人が「ほかに怖いものはないのか!」と怒ると、書生は答えて言った。「ほかに渋いお茶を何杯か、怖いですね。」

(宋)葉夢得『避暑錄話』卷下

像亦可一灑然也

讀書而不應舉則已矣讀書而應舉應舉而望登科登科而仕仕而以敘進苟不違道于義皆無不可也而世有一種人既仕而得祿反嚶嚶然以不仕為高若

欽定四庫全書

避暑錄話
卷下

七十三

欲棄之者此豈其情也哉故其經營有甚于欲仕或不得間而入或故為小異以去因以遲留往往遂竊名以得美官而不辭世終不寤也有言窮書生不識饅頭計無從得一日見市肆有列而鬻者輒大呼仆地主人驚問曰吾畏饅頭主人曰安有是理乃設饅頭百許枚空室閉之徐伺于外寂不聞聲穴壁窺之則以手搏撮食者過半矣亟開門詰其然曰吾見此忽自不畏主人知其紿怒而叱曰若尚有畏乎曰有

猶畏臘茶兩碗爾此豈求不仕者也

『笑府』に収録された「饅頭」

〔解説〕

この話はどのようなにして日本に伝わったのだろうか。

明代の末、蘇州の文人であつた馮夢龍は、中国の古今の笑話を集大成した『笑府』（全十三卷）を出版した。中国の笑話全集であるこの本の中に、宋代の『避暑錄話』の中の「饅頭」の笑話も収録された。

想齊一二隻耳、大為治一盃、意欲與妻同享、方往取筋回、而妻已染指散盡、止餘其一矣、夫曰、何不并啖此枚、妻攢眉荅云、我若啖得下此隻、就不害病了。

饅頭

有貧士饑甚、見市有鬻饅頭者、偽大呼仆地、主人驚問其故、曰、吾性畏饅頭、主人因設數十枚于室室中、而閉士于內、冀相困、以為一笑、久之寂如、乃啟門見其搏食過半、詰之、則曰、不知何故、忽不覺畏、主人怒叱曰、汝得無尚有他畏乎、曰、無他、此際只畏苦茶兩碗。

糕

有叫賣糕者、聲甚要、人問其故、曰、我餓耳、問既餓、何不食糕、曰、是饅頭的、兩曰、皆

糕

この『笑府』という本は、いまどこにあるのか？

一説云、病夫問曰、想甚食否、妻曰、除是外、
想齊一二隻耳、夫為治一盂、意欲與妻同享、方往
取筋回、而妻已盡、止餘其一矣、夫曰、何不
并啖此枚、妻曰、眉答云、我苦得下此隻、就不害
病了。

饅頭

有貧士餒甚、見市有鬻饅頭者、偽大呼仆地、主人驚
問其故、曰、吾性畏饅頭、主人因設數十枚于室室中、
而閉士于內、冀相困、以為一笑、久之寂如、乃啟門、見
其搏食過半、詰之、則曰、不知何故、忽不覺畏、主人怒
叱曰、汝得無尚有他畏乎、曰、無他、此際只畏苦茶兩
碗。

糕

有叫賣糕者、聲甚要、人問其故、曰、我餓耳、問既餓、何
不食糕、曰、是饅頭的、兩曰皆
低聲說

糰粿

『笑府』の輸入と翻訳

〔解説〕

『笑府』は、中国では早くに失われたが、日本の国立公文書館に江戸時代に輸入された原本がいまも所蔵されている。

この本が輸入されると、日本では明和五く六年（一七六八く九）に大ブームが起こり、三種の翻刻本（ほんこくぼん）が出版された。

左の写真は明和六年に出版された

『刪笑府』の中の「饅頭」である。

有栽楊^{ヤナギ}等^{ナド}者^{ナリ}命^{ノミ}童^{ドウ}守^{シュ}之^ノ旬^{ジュン}月^{ゲツ}不^レ失^ス一^ニ株^キ王^{ワウ}喜^キ謂^{イフ}童^{ドウ}曰^ク汝^ニ用^ユ心^{シン}可^ク佳^カ然^{シテ}何^ニ法^{ホウ}而^{シテ}能^ク不^レ失^ス荅^{コタヘ}曰^ク我^ガ夜^ヤ夜^ヤ拔^{ヒキ}來^キ藏^{カズ}在家^ノ裡^ニ

醃蛋

甲乙兩鄉人入城偶^ニ啣^{クハム}醃^{ウツ}蛋^{タン}甲^カ誦^ス曰^ク此^ノ蛋^ノ何^ニ以^テ獨^ニ塩^シ乙^ニ曰^ク我^ガ曉^シ得^ル了^ス是^ノ醃^{ウツ}鴨^カ哺^ボ出^デ來^キ的^{ナリ}

饅頭

有^リ食^シ士^シ餒^{ウツ}甚^シ見^ル市^ノ有^リ饅^{マウ}頭^{トウ}者^{ナリ}僞^ニ大^ニ呼^ブ仆^テ地^ニ王^ノ人^ノ驚^ス問^フ其^ノ故^ヲ曰^ク吾^ガ性^ノ畏^ル饅^{マウ}頭^{トウ}王^ノ人^ノ因^テ設^ス數^ニ十^ニ枚^ニ于^ニ空^ノ室^ニ中^ニ而^{シテ}閉^ル士^ヲ于^ニ内^ニ巢^ノ相^ニ因^テ以^テ為^ス一^ニ笑^ニ久^シ之^ヲ寂^シ如^ク乃^ハ敞^ノ門^ヲ見^ル其^ノ博^ク食^シ過^ス半^ニ詰^メ之^ヲ則^チ曰^ク不^レ知^ル何^ニ故^ヲ忽^チ不^レ覺^ス畏^ル王^ノ人^ノ怒^リ叱^シ曰^ク汝^ニ得^ル無^ク尚^モ有^リ他^ノ畏^ル乎^ヲ曰^ク無^ク他^ノ此^ノ際^ニ只^ニ畏^ル苦^ク茶^ヲ兩^ニ

『笑府』の輸入と翻訳

〔解説〕

中国から輸入された笑話は、やがて舞台を日本に移し、江戸小咄、さらに落語へと発展した。



江戸小咄『氣乃藥』

安永八年(一七七九)

饅頭

四、五人集まっている所へ、瘦せた色の悪い男が片息になって、がたがた震へてきて

「あとから饅頭売りが参りますが、私はその饅頭がどうも怖ろしうてなりませぬ。どこぞへかくして下され」

といへば、物置へかくしておいて、いたづらに右の饅頭買って、盆へ杉形に積み上げ、物置の内へ入れて戸をぴっしやり建てて押へて居るに、久しく過ぎても音も沙汰もなし。

まを落しやした

饅頭

五人集つて居る所へ、やせ

色の男が片息くひいきになって、がたがた震へてきて

まの

まんぢう

土

ろくで来て、饅頭売りが参る

まへに私にあのまんぢうがぞうりおそろ怖

ろくで来て、まを落しやした

江戸小咄『氣乃藥』

安永八年(一七七九)

もし怖がつて死にはせぬかと明けてみれば、饅頭は残らず喰つて、口なめずりをして居るゆへ、

「手前はあまり怖がつたから、おどしに入れたが、そう喰つて仕廻ったは、どこがこわいのだ」といえば、

「アイ、この上はお茶が二、三ばい怖ふござる」

てござるゝくを女アイサ 袴はかまのりゝ

まを落しやした

饅頭

あつゝ集つて居るあゝやせの

い男が片息くいきあゝかゝゝぬ

まの

まゝて来てはゝゝまんぢう饅頭まんぢうがゝゝ

まゝゝ私あおそろのまんぢうがゝゝも怖

そゝゝあゝまおそろめおそろぞおそろくおそろかゝゝてゝ

何が日本固有の文化なのか？

〔解説〕

では、日本固有の文化とは何だろうか。

落語「饅頭こわい」は、江戸時代に中国から輸入された笑話を原話としている。しかし、その後二五〇年の間に、漢文として読まれ、日本を舞台に翻案され、さらに落語として芸が磨き上げられてきた。

こうして、いまも多くの人々に愛される日本固有の伝統芸能となったのである。



古代の日本は、中国に計十九回も遣隋使や遣唐使を送り、先進的な制度や文化の輸入に努めていた。

この時代、日本で唯一使われていた文字は、「真名」（まな 正式な文字の意）と呼ばれた漢字であった。

〔解説〕

日本の民族文字「かな」



日本の民族文字「かな」

〔解説〕

しかし、中国に使節を派遣したのは、日本だけではなかった。アラビア(大食)は三七回、ペルシア(波斯)は二六回も使節を派遣していた。

漢字を唯一の文字としていた日本とは異なり、アラビアでは六世紀にアラビア文字が作られ、そこからペルシア文字やウィグル文字など、独自の民族文字が生まれていた。

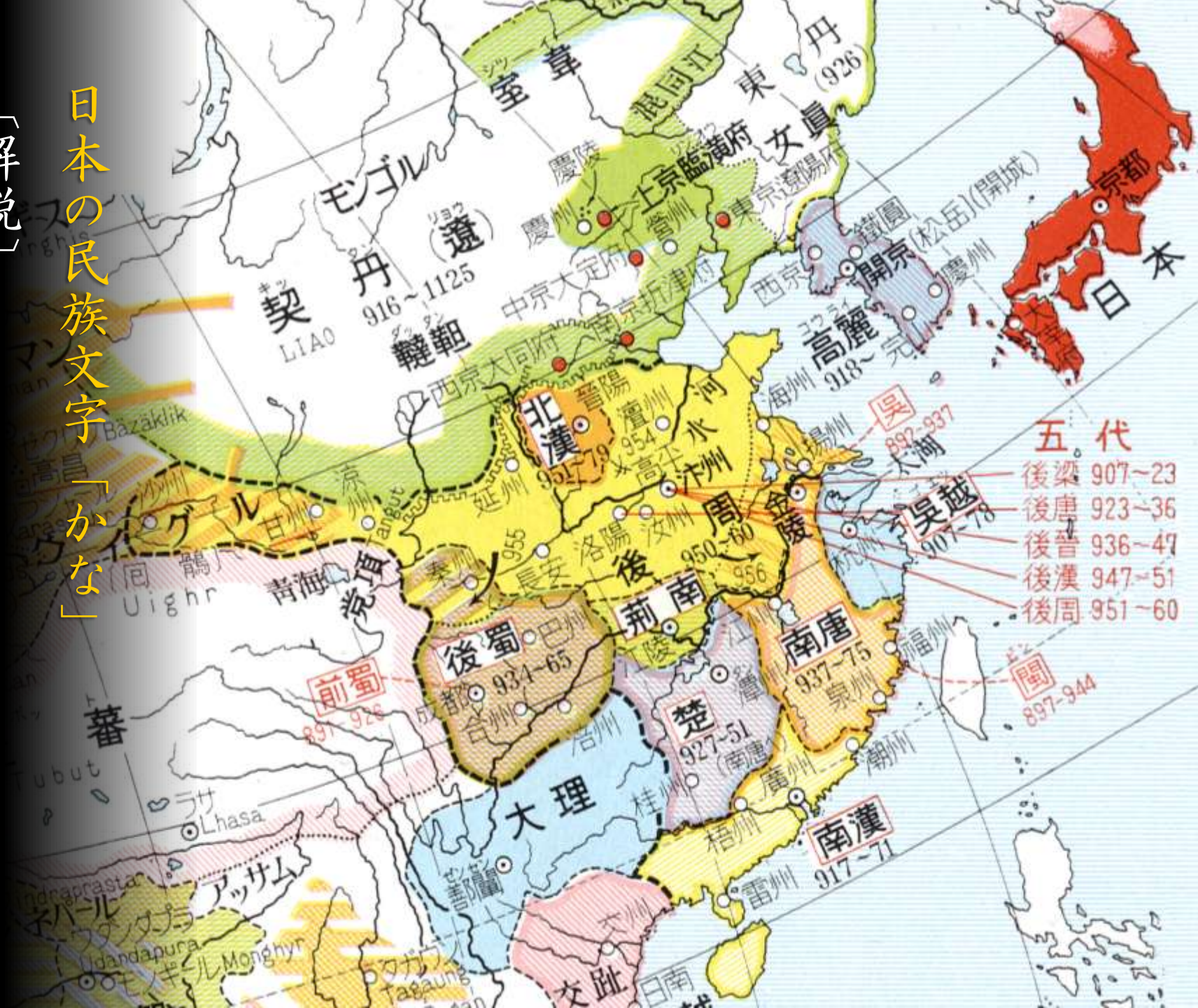
1971年、陝西省乾県で発見された
唐章懷太子墓壁画（陝西歴史博物館蔵）
鴻臚寺の役人と外国使節が描かれている



世界には、自らの言葉を自らの文字で記す国々がある。そのことを知った日本では、九世紀ごろ、独自の民族文字「かな」が誕生した。そして、九〇七年に唐が滅亡すると、漢字の呪縛を脱し、「かな」による国風文化の時代を迎えた。

「解説」

日本の民族文字「かな」



民族文化の独立宣言

『古今和歌集』仮名序

やまとうたは、人の心をたねとして、万の言の葉とぞなれりける。

世の中にある人、事・業しげきものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて言ひいだせるなり。

花に鳴く鶯、水に住む蛙（かはず）の声を聞けば、生きとし生きるもの、いづれか歌をよまざりける。

力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をもやはらげ、猛き武士の心をもなぐさむるは、歌なり。

日本の民族文字「かな」

「かな」は漢字の草書体から作られたものだが、いまではもとになつた漢字の記憶は失われ、日本語を記述するための独自の民族文字となつてゐる。

ひらがなのもつた漢字

楷書
草書
かな

安	加	左	太	奈	波	末	也	良	和	无
あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ	えん
以	機	之	知	仁	比	美		利	爲	
い	き	し	ち	に	ひ	み		り	る	
宇	久	寸	川	奴	不	武	由	留		
う	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る		
衣	計	世	天	祢	部	女		礼	恵	
え	け	せ	て	ね	へ	め		れ	る	
於	己	曾	止	乃	保	毛	与	呂	遠	
お	こ	そ	と	の	ほ	も	よ	ろ	を	

なぜ中国文化を学ぶのか？

このように中国文化が東アジアの諸民族に及ぼした影響は計り知れない。

文字についていえば、表意と表音という二つの機能を備えた漢字の発明は、言語を異にする東アジアの諸民族に漢語という共通言語 (Lingua Franca) を与え、それを基盤とする文明圏の成立と高度な精神的交流を可能にした。

中国の文化Ⅸ 第2回

殷代

殷王朝の存在を証明した
中国最古の文字

なぜ中国文化を学ぶのか？

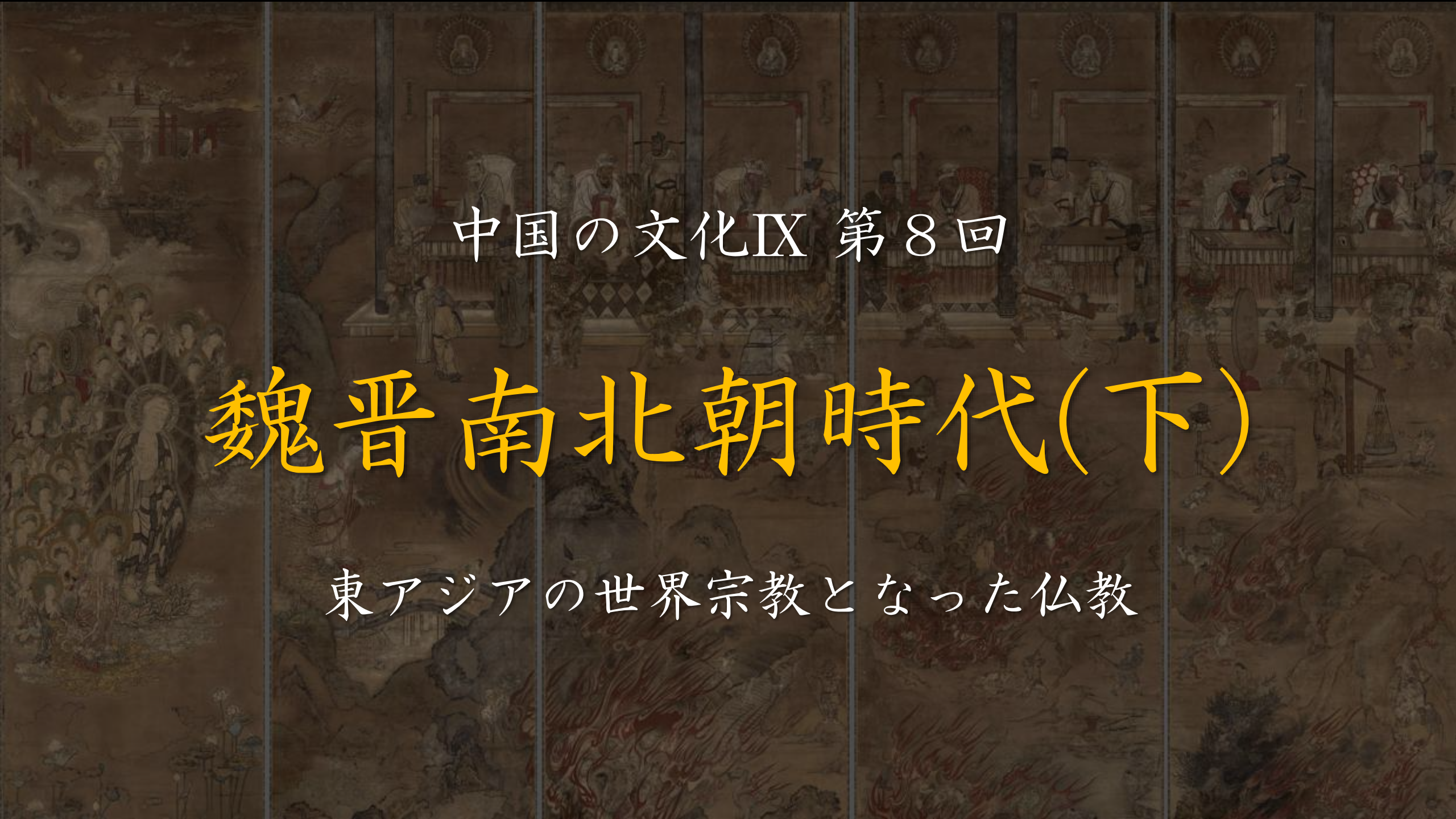
思想や宗教でいえば、漢代以降、中国の国教となった儒教は、東アジアに倫理観にもとづく国際秩序と社会秩序をもたらし、またサンスクリット語仏典の漢訳（中国語への翻訳）は、東アジアに仏教という世界宗教を成立させた。



中国の文化Ⅸ 第4回

春秋戦国時代

儒教の誕生



中国の文化IX 第8回

魏晋南北朝時代(下)

東アジアの世界宗教となった仏教

なぜ中国文化を学ぶのか？

科学技術でいえば、中国の四大発明として知られる紙や印刷術の発明は、東アジアのみならず、世界の文明の発展と知識の普及に革命的な影響を及ぼした。



中国の文化IX 第6回

漢代

紙の誕生

侯
蔡倫字敬仲桂陽人也呂永平末始給事宮掖建初中爲小黃門
及和帝卽位轉中常侍豫參帷幄倫有才學盡心敦慎數犯嚴顏
匡弼得失每至休沐輒閉門絕賓暴體田野後加位尚方令永元
九年監作祕劔及諸器械莫不精工堅密爲後世法自古書契多
編呂竹簡其用縑帛者謂之爲紙縑貴而簡重竝不便於人倫迺
造意用樹膚麻頭及敝布魚網呂爲紙元興元年奏上之帝善其
能自是莫不從用焉故天下咸稱蔡侯紙相州記曰未陽縣北有漢黃門蔡倫
宅宅西有石曰云是倫春紙日也
元初元年鄧太后呂倫久在宿衛封爲龍亭侯龍亭縣故城在今洋州興
姚縣東明月池在其側
邑三百戶後爲長樂太僕四年帝呂經傳之文多不正定迺選通
儒謁者劉珍及士良史詣東觀各讐校漢家法令倫監典其事
倫初受竇后諷旨誣陷安帝祖母宋貴人及太后崩安帝始親萬

機勅使自致倫恥受辱迺沐浴整衣冠飲藥而死國除
孫程字稚卿涿郡新城人也東觀記曰新城人衛康叔子孫林父之後東觀白
史官懼程等威權故曲爲文飾安帝爲中黃門程事長樂宮時鄧太后臨朝帝不親
政事小黃門李順與帝乳母王聖共譖太后執金吾惲等言
欲廢帝立平原王德帝每忿順太后崩遂誅順氏而廢平原王
封閏雍鄉侯又封小黃門江京爲中書郎初迎帝於郡呂功封都鄉
侯食邑各三百戶

中国の文化IX 第11回

五代十国時代(上)

印刷術の発明と書籍出版のはじまり

凡欲讀經先念淨口業真言通
循唎
奉請除灾
奉請白淨水金剛
奉請紫賢金剛
金剛般若波羅蜜經
如是我聞一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園與大
比丘衆千二百五十人俱尔時世尊食時著衣持
鉢入舍衛大城乞食於其城中次第乞已還至本處
飯食訖收衣鉢洗足已敷座而坐時長老須菩提在大
衆中即從坐起偏袒右肩右膝著地合掌恭敬而
白佛言希有世尊如來善護念諸菩薩善付囑諸
菩薩世尊善男子善女人發阿耨多羅三藐三菩

なぜ中国文化を学ぶのか？

文学でいえば、中国歴代の文学、とりわけ市井の人々の間で次々と生み出された俗文学は、東アジアの庶民の間に新たな文学を生み出す契機を与えた。

落語の原話となった『笑府』や、この授業の最後で取り上げる『三国志演義』などは、わが国の芸能や文学にも多大な影響を与えた。

中国の文化IX 第14回

北宋時代(下)

三国志の誕生

なぜ中国文化を学ぶのか？

日本文化の独自性や価値も、中国文化との関わりを無視しては語ることはできない。

この授業を通じて、まずは中国文化の歴史を理解しよう。

